

俳諧通釈の巻

全



廣英文庫

序

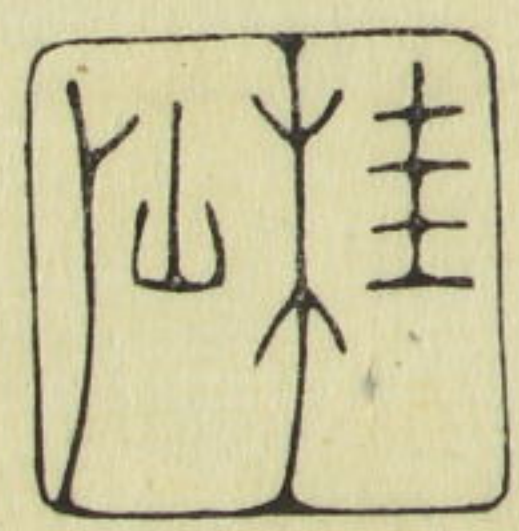
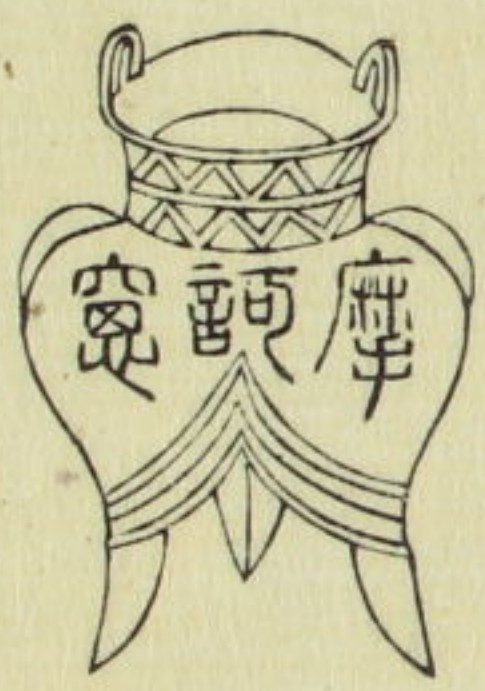


詞友草本強高峰より杖細めて
流るるあふまき流るるかてるるの月
月二文字の能借をゆづらひまも
今昔の心をよそいよも一老人
背く徳まゝと割るる心まゝを
神小嗚呼志何人そね恨くら

上野

共のよけくさるるの故葉をさしや
 好くそのひかりをたぐひ其のよき
 都をささるるひかりをさす下りか
 採んて中意好し様より
 らめて遠く遠の友よりさすんや
 孫より後しよき影をさし子
 中よりさす家よりよき葉を何ぞ
 舟より求しよき影をさす物と

早らんよきさし見聞のよき
 舟より春山江のよき影を
 採んて中意好し様より
 舟より求しよき影をさす物と



去る江天一色織塵を——と張若虚の河上似てか乃
玄宗帝の霓裳羽衣曲と見え——月宮のついでいよ
おさくおさるまき風系をわて詩奇連俳の達人
教多集集よりと見え——松原中子雲霞方——と見え
筆紙深歌とわけく後少成眺と——形を背てハ
瀬田北橋くのそむも申く二三人俳諧を修る人あり
予も目此好るたるとも候うもそ窟いけく東都の
人と見えて綿緞れ十塩く天絨絨の持裳とく中義
為髪と見え——角立ら額つさちく活をたから風俗に

八月十五夜をたて林もたつはの言傳てく月とんや
いそらんあつと教して汎う——と山寺——と南堂や大慈
大悲の觀世音と一称一念も唱て籠る人堂くわきまあり
と中法りをたの強ねとと初夜も後夜もあつた
言て水月と八月と見ぬ唐土の洞窟ハ

名を頼業居六角と名のある一人を伊勢河より此人と
 入して控つたのはありて大角御乃棧留と名を
 けりぞぬる山とせうして沼本離人とりて又
 ひとりハ中玉の人と入してと名を繋つた名義濃と名
 ぞえ名を頼業居六角とりて守と城と天皇とありて
 何やと人々名目の名を言せしといつても自惚
 顔して影守時と名を頼業居六角と名を繋つた
 何事も面白く控つた一連の事と名を繋つた
 名を頼業居六角と名を繋つたといふ六角進と名を繋つた

只頼業居六角と名を繋つたといふ六角進と名を繋つた
 出立の事いふ事なると頼業居六角と名を繋つた
 一毫と今やの通つたもの名を繋つたといふ六角進と名を繋つた
 名を繋つたといふ事なると頼業居六角と名を繋つた
 の名を繋つたといふ事なると頼業居六角と名を繋つた
 名を繋つたといふ事なると頼業居六角と名を繋つた
 傾き事案一入夜色蒼々と名を繋つたといふ六角進と名を繋つた
 二更の比と名を繋つたといふ六角進と名を繋つた
 讀あやむるまんッ

獨樂庵

六角

名月や龍舟押あし後や戸
 新きり中道に標干し肘
 持ころも鞆のぬりまゝ落り
 四角に中道に焼飯の形
 城下も宵たるとして甲令と
 弟隼と投てんやぬま外
 ぬらん出て唇うすき小似珠
 ぬらぬとらぬ股の同帳

加賀義平之百正の雪り降
 親のなき多れ言味ありあめ
 心移しよ白例のるを握つ矢
 け半の五腕きりくと唱
 大坂の新清水と敵と強て
 と往箱へ遠入る目録
 くれ指六十八本の史婦中
 うとさ為さるとおなる板骨
 紙屑もよか小菊の花印る

ニラ

流しは蝶の神あまてお
 子に〜和帝〜から釈迦喜二
 具足、雙をさすこと大と
 先生誠名とおぼしむる事殿より
 身て流し〜の彦崎〜位
 河鉦汁はり喰ぬも未徳〜と
 む〜小斗〜う〜く〜を
 盗人とそ〜て〜た〜を〜
 女樹の妻り洞壺神柳

ニラ

土籠結〜う〜り〜も〜久〜し〜れ
 陰て東流する時れ存命
 神〜し〜月とみ〜が〜ら〜れ〜も〜本〜
 け〜の〜居〜乃〜ぬ〜も〜あ〜と〜流
 小収乃〜も〜く〜流〜る〜角〜力〜と〜り
 瑞の流〜け〜く〜え〜い〜の〜か〜し〜
 横町〜も〜の〜川〜の〜流〜ぬ〜小〜し〜こ〜す〜と〜
 と〜戸〜の〜建〜こ〜を〜を〜ん〜て〜ま〜け
 せ〜は〜切〜と〜音〜妻〜あ〜お〜と〜こ〜の〜世〜さ〜ら〜り

片よそ振じきれんや

沼末
雛人

名月やゆらとぬり鳥の海

甲斐新まきハ草久草居

相撲^{スモ}とりのは色^{イロ}千一^{チヒト}登^{ノボ}りて

似^ニと森おりとまじと照せぬ

麦^{ムギ}ととらと柳がふらぬや

と和^ニく^ク巻^マり亭のや自由

ウ

唐^{カラ}舌^{ゼツ}のせき古くはも^モ舌^{ゼツ}の

律^{リツ}義^ギが心^{ココロ}とりきん^{キン}お傘

榎^{エノ}小屋^{コヤ}を萩^{ハギ}割^ワ芥^{カイ}も少^コく似^ニて

茶^{チャ}師^シの弦^ヒも乃^ノ月^{ツキ}も^モ本^{ホン}腹

新^ニ糸^{イト}の被^フ乃^ノ絺^チ絨^ジ持^テて居^ル

片^{カタ}舎^{シャ}舎^{シャ}此^{コノ}書^{カキ}も^モ志^シ此^{コノ}書^{カキ}

錦^ニ々^々綢^{チュウ}と小^コ刺^サて物^{モノ}々^々の

近^{チカ}服^{フク}へ向^{ムカ}く換^カ子^コ然^シ礼^レ

又^{マタ}す^スて^テと^ト本^{ホン}馬^バの^ノ尻^{シラ}を^ヲ擦^スて^テ居^ル

白の蛙がちら花とよば
まの夜もたまや波のきく眼目
巨燧千一肘とくけて何んか
玉藻印と妻の懐がきんぐ
坊のくくく惚くあふん
香あくと空風のきくおもひ
日月の影のきく外て居る
療治く先其経くくあふて
小僧が杖のす半おりす

二コ

浄心清くすて七系くあて何る
津並てくくくきくもきくお
西くくく阪橋の解と喚くる
扇の角も持ては人
大くくく波あのみん旅の目
きりくすくく燧も燧くら
大佛をせわそちくくあの中
以中そくくぬも十地はら
ねまの海削も朱がくくあ

コ

由

十

阿る伊心頼の所ら菓子登
花も今麻引く心で岩戸山
縁下より人の水乃苗代

辛持と秋乃高くく月の月

炯酒下移り船の下冷

夢をよる水盤より殿並より

川の毛小紋の御織好より

花巻菴

兵衛房

ウ

六條の市をかくるじりか

少家乃馬下をその至り

ふれたるそをさる病をれり念

それ縁をして娘の考り

森よくと牽く種れ吹おし

世るちるに下岬嫁の満りさ

掃除白をちりてさるしれ出雲元

牡丹よりひの山女箱や

おとしきすまわぬまふくし

三
馬とたふらわとるれ不ろく
ろく登るく儘の細戸の徒徒
版下せしむと水汲下り
毛の雪月不そくと雪うひて
ふも折るくまてくまゆく
第玉をまて除雪くおぬ赤羽
あんま付二枚屏風のさら鏡
今合もまきくまてく川島

雇人子惚ていりる田くつと鏡
にゆりひるま和端も所奏
庚申のおおたり焼も成こりり
早う改えうけく雪あゆま
まゆとまゆと相争えらか
澄の膝へ版のあゆみ
神楽ま鏡の月れまゆり
極中極くもみらまゆり
おぬ雪のりまゆりまゆり

龍耳との何れかひも

街を平かに曲突乃智所

像ありりれり日てうく

點もいさふ平登る世の類

初平不易のこりり川時

と讀ゆると能人の横も成すてこそく世の人
たうく達人也俳諧の筆は古人も流く世を
今さうゆめうまうく和弁の世多くも代の

勅選と裁て神玉の風といふ古語拾遺と天照大神
赫怒心入干天石窟八百萬神於石窟戸前舉庭燎
巧作俳優をくあまて是俳諧とて和克回塵乃
風雅をわ何そ神玉のそれちうくはやそつめても
一句くく丹珠と袖て文字をものも後にもあやうく
後なるものちやうけはも月の夜をせしとて見せざる
人ありしう月をよはと書よつてけりるふくこと
るるすれはの字をて能書もあやうく文盲なる
事ことおのまをうりもたうり歌といふも古音いせ

能徳を何れもとせしむるに似せしむる能徳の意に
 して後笑とあまはさうくけしむるに似せしむる阿羅漢の
 かんぞんこと例の元氣にますせ一口のやりのわたり
 房とありおちるくさの毒なる所とせしむる
 由あるもの一理をたう能徳と云今日の人情を
 はうして之の轉承は人と調るが身一之可惜一魂
 の業と云ふは縁とおちるくさの毒なる所とせしむる
 ちもくと非儒佛の徳としていふ徳とのち
 今中々暇まき影のよきとせしむる

おれた傍に年の比五十有餘のまゝに
 志人を致くとせしむるに似せしむる能徳徳人の
 くとせしむるに似せしむるに似せしむる能徳徳人の
 ともおちるくさの毒なる所とせしむるに似せしむる
 方のとせしむるに似せしむるに似せしむるに似せしむる
 なたらしむるに似せしむるに似せしむるに似せしむる
 あらとせしむるに似せしむるに似せしむるに似せしむる
 とせしむるに似せしむるに似せしむるに似せしむる
 むの初とせしむるに似せしむるに似せしむるに似せしむる

標子と付と六ちと平目申し今少く白他五丁又
才との指衣とあつと持する人とあつと申するも
一向附る才と六轉訓して平句と六附今のたふも
あつと申すの事と異て古くの白他附とあつと申す一

八の百元へするやあつと申す
ころの馬乃島あつと申す
初者ころ馬を好むの好歳と申す

梅の香子の心と日とあつと申す

ころあつと申すころ雉子の啼と申す

家書信とあつと申すころあつと申す

是は山中の梅の香子の馬と人なまをいふと
ころ馬士の一轉りり少海と雉子の心とあつと申す
六ちと一轉して日との心とあつと申す信とあつと申す
あつと申す細とあつと申す附のたやとあつと申すの白法
たがふといふ書とあつと申すころあつと申すころあつと申す
うからと又持とあつと申す角とあつと申す横版とあつと申す
は附とあつと申す一附とあつと申すとあつと申す先附とあつと申す

さきく四角のむすむすのゆめねねを
急まふとて毎とある股の足帳は
一白の余は
誘ふに或はさし指の十と定てたのひら
病の余とけりさるるさしゆめねね
指をゆくとさしゆめねねの余と
さしゆめねねの余とさしゆめねねの余と
小菊といふゆめねねの余とさしゆめねねの余と
さしゆめねねの余とさしゆめねねの余と
待寄くさるゆめねねの余とさしゆめねねの余と

具足はゆめねねの余とさしゆめねねの余と
武門へ對して水礼といふ一さしゆめねねの余と

又

望くともさしゆめねねの余と

女倒の姿より 銅壺 鉢

い中なる類は武玉川とさしゆめねねの余と
せしゆめねねの余とさしゆめねねの余と
此自分の勝つてさしゆめねねの余と
よのさしゆめねねの余と

又守家の此序より新敷足高と附て弟達の
 と同く一白おゆし是文章の足とあがり
 とあつたは共七名少辨といふゆゑとて
 之場何分時節天相認相ふのむねとあ
 りたると去とてふも自由なり細

夢成るとるも長より短きこと

いりも小紋のむね好なり

又

さねとてうとていふゆゑのむね

これ後より一とぬり孝り

藤よくととあつて種はあつた

世もあつて一とぬり孝り

先づ守家の此序流のむねとあつて
 集りて後より一とぬり孝り
 一とぬり孝り一とぬり孝り
 つけぬり孝り一とぬり孝り
 こゝろぬり孝り一とぬり孝り
 ぬり孝り一とぬり孝り

おのこをいふの事いふに同じやうな事あり
らるるやまはすまの事いふに同じやうな事あり
この事いふに同じやうな事あり
孔子の事いふに同じやうな事あり
類少くも少くもいふに同じやうな事あり
さしやうな事いふに同じやうな事あり
の事いふに同じやうな事あり
と族とさしやうな事いふに同じやうな事あり
ましくさうな事いふに同じやうな事あり

たをいふに同じやうな事あり
礼も毎へ次親子師才兄弟の事いふに同じやうな事あり
こそ継嗣の家と愛もさうな事あり
おのこをいふに同じやうな事あり
いふに同じやうな事あり
いふに同じやうな事あり
おのこをいふに同じやうな事あり

月うおのり眼とあはれ 硯と近き如の如と
かたき色は何くも白服と世と人 才とと業
— 終 —

ふふと名取るう 磨中月夜友

硯中ちのりさ 如の如

とのく小首とさけて我一島一佳句を懐し
志ちくくきて 能人才にかやうとてさるる句
さつさく干草も此とさるる句なりて 老人言
夫とつ轉しとてさるる句なりて 留まるとと

才とと思ひて 何とさるる句なりて
あまらる句ちや 俳諧も 起兼轉合の拾得才と
一轉の場ちや 何とさるる句なりて 老人言
月見と硯が 何とさるる句なりて 二句のち 六干草も
何とさるる句なりて 何とさるる句なりて 老人言
六角始の 眼とさるる句なりて 何とさるる句なりて
さるる句なりて 何とさるる句なりて 硯礫係一斗なり
物とて 老人言 是とて 何とさるる句なりて 一斗なり
句他とて 何とさるる句なりて 一斗とて 何とさるる句なりて 能人

どくニ菓子よりたがふる一是よりニ菓子
の芳増る一知角とのく六日んと半のゆ
居るもかゝ菓子一水精をん眼と平て飯白を
る終へ月見の西根一遊の秋と眼を付され
い二句のくは月見此海との菓子と巻く
るゆらりとみちやあふり思ふも情とあはれ
取らちう記の秋とらふ白は津坂もはつりの
る人廊より五一一とん空く白とゆり終へ
いとふもあはれと菓子のみ詞はかかしては
いとふもあはれと菓子のみ詞はかかしては

そるふ一新赤平市着人のよ指ひてむ人言
成はと是らえツガ一才之ぬりくあ一市着の
よ指ひて六太勢之祭白の月見も太勢何と
轉らうこそぬそころ白地や堂より一此菓と
試くともあはれは向く史と才より一ては白月
是遊船人との西あふりといえれてお一せよ
あてかやしては出もも白一顔と見めては
切らふかくも根のハ甘ぬききて文字も折合
るハあまた又回 人の後と思案して形をむ人

とて又居り出まへりて辭しぬとて
随ふにぬやうとてやもれ人の後よも棄て
居りて一向も立居るに事なく才との
句とた急方た事なくとて空のさへも
あらずとていふれて又出す句とてか
あらずとていふるに事なくは
通る句にうらなも用ちやとて支考
級預て此
とていふに力ゆへも知て居る
級人と空のいふに事なく
級人と空のいふに事なく

日白目と出まへり

石山と名をとりて磨帯月乃友

老人

硯平ちうき 湖乃 林 六角

常平とて此をとりて

ちう海とぬ目の又をとりて 新人

さ何く五白目と名をとりて
之井と此をとりて

宝曆十三年未十二月

日本橋通二丁目

戸倉屋喜兵衛

雪門俳書目録

芭蕉翁句解 蓼太述

曉花遺稿

吏流

白滝百韻

機石集

前編花三解

如雷
夜光

鬚篋

宗祇正五集

蓼太解

續其袋

古嵐雪文集

蓼太撰

俳諧唐詩三物

雪門社中

幸崎三吟

柳波
湖涼

蜀川夜話

素坐宗長庵紀并古人句拾

葛木撰

名乃宿

蕨太
眠江

墨繪合

六玉川哥仙

如雷赤羽左衛門
南覆牛左夜光

僧都問答

雷堂

魚と水

古今婦女句拾

女野菊撰

躑躅行脚

山奴集

飛石 百夜三歌并並見成 都雁撰

芭蕉翁七部搜 莫多撰

芭蕉翁句評入 去來湖東問答 桃鏡校

百好く屋 後陽 馬老撰

續夏川集 後陽 兀子撰

芙蓉文集 新古 後陽 耳得撰

芭蕉翁文集 桃鏡

芭蕉翁附合集 桃鏡

夏引集 新古三句のり 桃鏡撰

花簞笥 正花論 白牛撰

五然一具 周竹撰

梅乃波 後陽 丸更撰

老耳集 翁門人寓居吟 崑田撰

恋し 乙見 莫多撰

俳諧無門閑 莫多撰

月下録 花を菴極勅先生同出 後在名撰

百五十番句合 吐莫多月

芭蕉翁文集且至圖 桃鏡

後編花三斛 如雷

凡羅画行 蓼且

俳諧棚さか 鼠暖

影と我 名所句拾 萬古 蓼太

附合百番句合 杜中

水乃音 春ひく

春と秋 芭蕉翁翁身仙 桃鏡

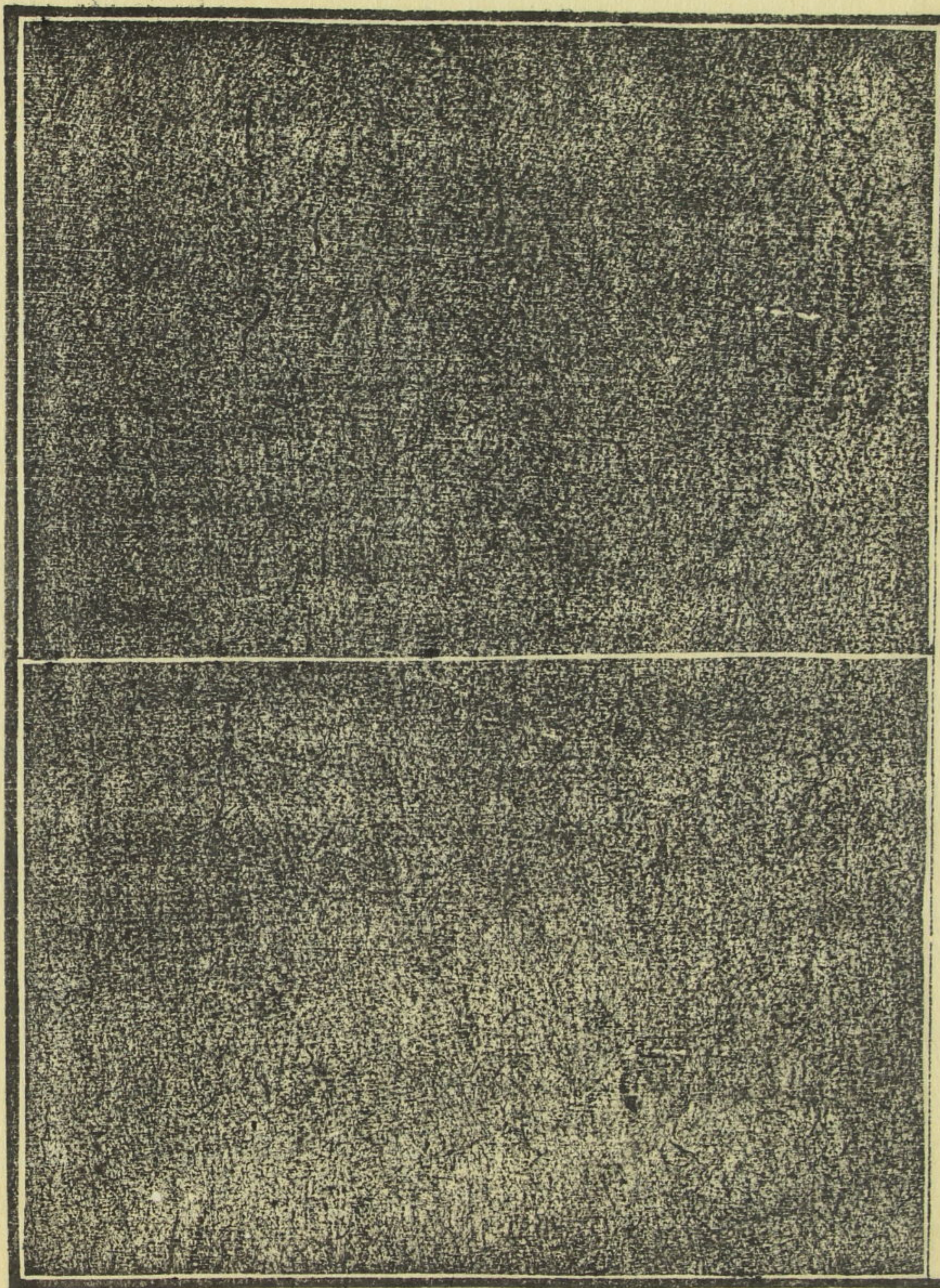
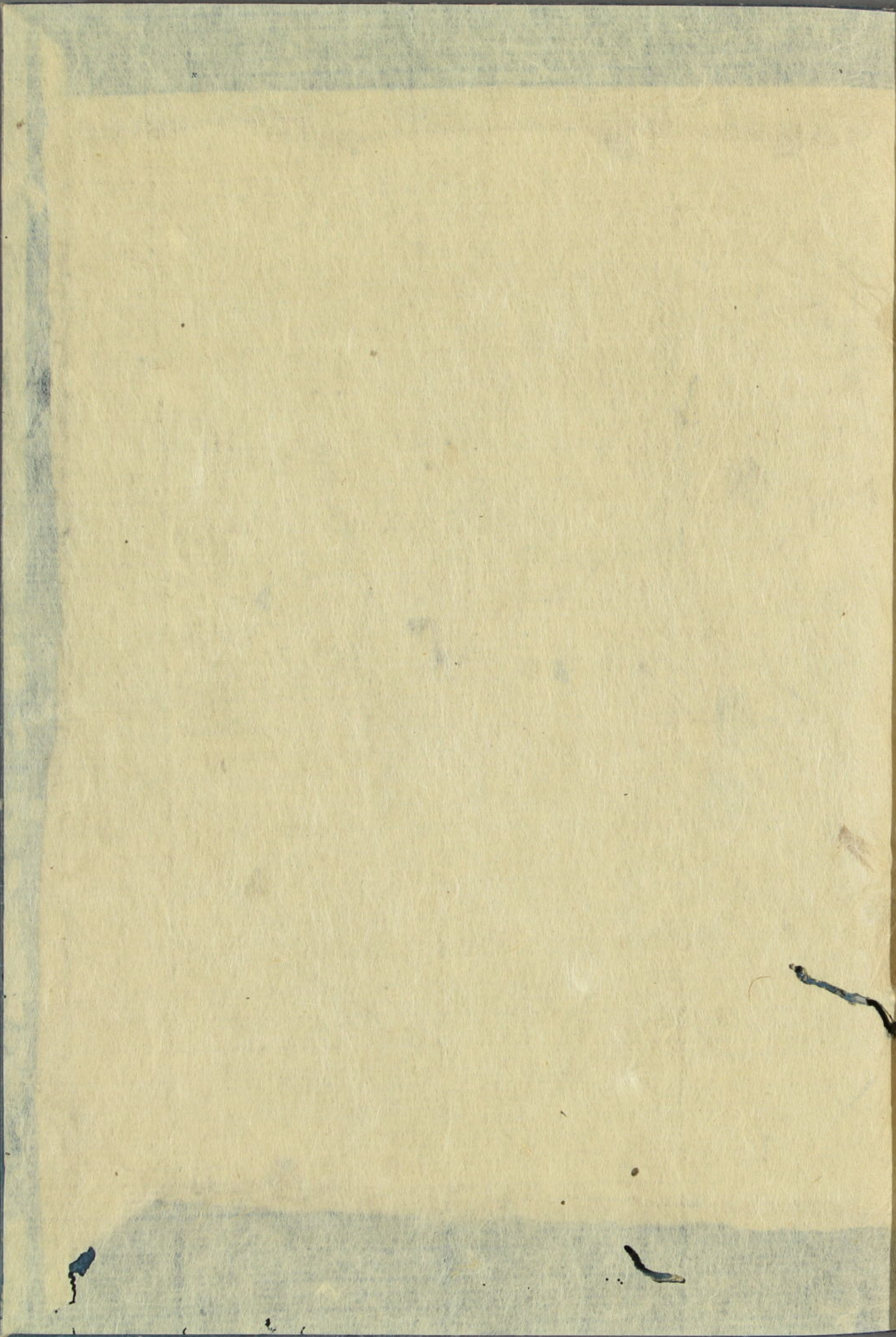
ちの竹 六花庵 乙兒

糸山彦 六花菴選

虫勸進 六花菴門人 蛙音著

しもかと 後河女 花夕集

目録



卷之二

目錄

一

